

江畔独歩花を尋ぬ（杜甫）

黄四娘家花滿蹊 千朵萬朵厭枝低  
留連戲蝶時時舞 自在嬌鶯恰恰啼

黄四娘の家花蹊に満ち

解説 杜甫が成都に住んでいたころ、浣花溪のほとりを一人歩いていて、花をたずねて作った詩。

千朵万朵枝を圧して低る

語釈 ※江畔＝浣花溪のほとり。 ※黄四娘＝草堂の近くの村のお婆さんの名。「娘」はむすめの意でなく年配の女性の呼称に用いる。 ※蹊＝こみち。 ※朵＝花のついた小枝。 ※留連＝そこに続けている。 ※戲蝶＝たわむれる蝶。 ※恰々＝鳥の啼き声。

留連せる戲蝶は時々々に舞い

通釈 黄四娘の家では、花がこみちに咲きみちっている。枝が枝をおしつけるように重なってたれている。いつまでも去らずに花に戯れている蝶は、ときどき舞い上がり、自由自在に啼く愛らしい鶯は、コウコウと啼きたてている

自在の嬌鶯は恰々として啼く